

接触場面における意味交渉での母語話者の発話

- pushdown に注目した分析の試み -

Native Speaker Utterances in the Negotiation of Meaning
in Contact Situation: an Analysis Focused on Pushdown

徳永あかね (お茶の水女子大学大学院)

TOKUNAGA, Akane (Ochanomizu Women's University)

1. はじめに

これまでの日本語教育の分野では外国人を学習者として捉え、日本語を母語とする人との会話を学習の機会としてのみ捉えてきた感がある。しかし会話は言語学習の機会ではあるが、そのためだけに営むものでもない。コミュニケーションを通して生活上必要とされることを成し遂げるという目的を第一に考えたとき、言語学習という目的を離れ、そこに参加する対話者同士がどのように協力してそうした目的を達成するかを考えることも大切ではないだろうか。

通常、会話においてコミュニケーション上で何らかの問題が生じた場合、それを解決するために話し手同士が調整を行うことが知られている。「意味交渉 (negotiation of meaning)」と呼ばれるこうした行為を母語話者との間で行うことで、学習者の第二言語習得が促進すると考えられてきた (Long 1983 他)。これは学習者の第二言語能力の不足から起こるコミュニケーション上の問題を解決するために、母語話者が行う調整が学習者の理解に合わせた適切な input になる (Long) という考えに基づいており、「意味交渉を行うことでインプットがより確実に理解可能となるため、より学習者の理解が増す」という研究結果を多くの研究者が得ている (スカーセラ・オックスフォード 1997)。

しかし、実際の意味交渉において母語話者が行う発話が必ずしも対話相手である学習者にとって理解可能なものとなる調整が出来ているとは限らない。そのためさらに意味交渉自体が長くなってしまう現象が起きていることもある。本研究は、日常あまり外国人と接したことがない日本人が、日本語が通じない対話相手と話す際の問題点に焦点をあて、時間的な長さではなく、1つの意味交渉のなかで展開される交渉の数という尺度で意味交渉の長さを測ることを試みる。そこから意味交渉を長くする要因を母語話者の発話の適切さに注目して分析を行う。

2. 先行研究

ネウストプニー (1995) は接触場面の研究方法について新しい展開の必要性を示唆した。これまで行われてきた非母語話者の誤用分析では一方的に非母語話者だけに注目し、母語話者の役割に注視してこなかったことに触れ、もっと広い視野からの方法論として「問題分析」を提案している。これは接触場面で起こった問題についてその時点での会話参加者の意識を含めそこで何が起こったのか幅広い角度から分析を試みるものである。

接触場面の意味交渉の特徴として会話の参加者が行う調整行為がある (Ferguson 1971, スクータリデス 1981, ロング 1992 他)。さらにこうした母語話者が行う調整を非母語話者との相互作用という観点から談話単位で分析した研究はフォリナー・トークディスコース (FTD) 研究 (Hatch et. al 1978) とも称される。具体的には非母語話者が母語話者の発話がわからない時にどのように調整を引き出すか、またその調整が不適切な場合にはさらにどのような働きかけをするのか、といった1つの会話の中で連鎖的に起こる現象に焦点を当てた分析などである。

Varonis and Gass (1985) では意味交渉の会話構造に注目し、非母語話者同士の意味交渉を含んだ会話構造をモデル化している。彼女らは、誘因 (trigger)、表示 (indicator/signal)、応答 (response)、応答に対する反応 (reaction to the response)、という4つの要素で意味交渉における発話にラベルを付けて構造をモデル化し、意味交渉の会話構造を分析している。例えば、会話の途中で相手が言った言葉の意味がよくわからない場合、意味交渉を行い、その言葉の意味が理解できたところでまた元の話に戻って話を続ける。こうした様子をコンピュータの記憶データ取り出しのシステムを表す用語「pushdown (注1)」を当てはめ、意味交渉が解決されなければこうした pushdown が次々に増えていく現象を図解している。しかしこの研究では意味交渉のなかに新たな意味交渉部分の会話の固まりである pushdown が増え、会話構造が多層化していく様子を分析しているにとどまっており、多層化する、つまり pushdown が続いて起こっていく要因については注目していない。

日本語教育の研究分野において、マーカーやシグナル、あるいは「聞き返し」と呼ばれる意味交渉を始める発話についてこれまでに様々な分析が行われてきた。意味交渉で何が調整を動かす要因になったかに注目し、意味交渉の始まりのきっかけと調整の組み合わせを分類したもの (Miyazaki 1998, 宮崎 1999) や、発話意図、あるいは発話意図によって使用される言語形式を分類したものなどがある (尾崎 1992, 1993, 町田 1997, 御館 1998 他)。後者では例えば、相手の発話を明確にする明確化要求 (clarification requests) や相手の発話を正しく理解したり聞き取ったりしているかを確認する確認チェック (confirmation checks)、自分の発話が相手に正しく理解されているかどうかを確認する理解チェック (comprehension checks) などの分類がある。

尾崎 (1992) は「聞き返し」と「聞き返し」回避の研究の中で非母語話者が使用した「聞き返し」を文末の表現形式によって分類している。町田 (1997) ではその使用表現形式が母語話者の調整の引き出しにどのぐらい成功しているかを「調整の引き出し率」をもとに分析し、調整引き出し率の差や意味交渉を行う数が非母語話者の日本語のレベルに注目した研究を行った。その他、非母語話者の理解と母語話者の質問形式や質問の発話量との関連を分析した研究 (大平 1998)、接触場面において日本語運用能力の高い方から低い方への使用語彙の簡略化による発話調整に注目した研究 (和泉元 1998)、および語彙の修正パターンとその意図を分析した研究 (池田 1998) などがある。しかしこうした母語話者の調整の引き出しや、調整パターンに注目した研究は日本語の分野では端緒についたばかりである。

3. 研究目的・方法

3.1 研究目的

日本語能力が十分ではない初級学習者にとって、会話のなかでの意味交渉はある程度避けられない行為である。それだけに母語話者が適切な応答を行うことで、意味交渉が効率的に行われることが望まれる。

本研究ではまず第一に、初級学習者と母語話者とのインタビュー会話に出現した意味交渉を分析し、意味交渉が長くなる原因を母語話者の発話に注目して分析する。次に、初級学習者が頻繁に使用する語彙レベルの反復、その中でも特に語末あるいは文末を上昇させた発話 (マーカー) に対し、母語話者はどのような応答をしたのかに焦点をあてる。

意味交渉が効率的であったかどうかをみるにあたり、先行研究 Varonis and Gass (1985) の「pushdown」を意味交渉を構成する一つのユニットを表すものとして用いる。これを用いて、1つの意味交渉の長さを物理的な長さではなく、展開の様子という質的な長さで測ることを試みる。意味交渉の質的な長さを pushdown の数で示し、pushdown が1つで終わる意味交渉を「効率的な意味交渉」と捉える。

以上の2つの分析を通して、意味交渉における母語話者の適切な発話の示唆を得ること

を目指した。

3.2 研究方法

3.2.1 データ

初級学習者（以下、NNSと記す）が母語話者（以下、NSと記す）に対して行ったインタビュー会話を収集した。分析対象としたデータの量は表1.2に示した通りである。NNSは1人2回ずつ違うNSに対してインタビューを行い、1回のインタビューにつき、予め準備した17～20問の質問をNSに対して行った。

3.2.2 被調査者

NNSは鹿児島県招聘の海外技術研修生で、1999年5月8日に来日してすぐ、2カ月の日本語研修を受けるため、鹿児島県鹿屋市にある（社）アジア・太平洋農村研修センターに來所した。来日前の学習歴は表1.1の通りであるが、インタビュータスクを行った同年6月3日時点は、『新日本語の基礎I』第13課を学習中というレベルであった。

一方、NSは全員鹿児島県出身で、調査地で個人商店あるいは会社を営んでいる。表1.3中*をつけた3人はホームステイで外国人を受け入れるなど、外国人との接触経験があるが、その他のNSの接触場面経験は、接客したことがある程度であった。

表1.1-1.3 被調査者背景およびインタビュー会話組み合わせ一覧表

表1.1

	性別	年齢	国籍	学習歴
NNS1	女	30代	フィリピン	2ヶ月
NNS2	女	30代	アルゼンチン	2ヶ月
NNS3	女	30代	タイ	2ヶ月
NNS4	男	30代	インドネシア	3週間
NNS5	男	20代	カンボジア	2ヶ月

表1.2

会話データ1	NNS1	NS1	12分6秒
会話データ2	NNS1	NS2	7分6秒
会話データ3	NNS2	NS3	11分57秒
会話データ4	NNS2	NS4	12分44秒
会話データ5	NNS3	NS5	14分16秒
会話データ6	NNS3	NS6	18分32秒
会話データ7	NNS4	NS4	15分23秒
会話データ8	NNS4	NS7	12分20秒
会話データ9	NNS5	NS8	10分0秒
会話データ10	NNS5	NS9	9分52秒
合計	5名	9名	124分14秒

表1.3

	性別	年齢	経験
NS1	女	40代	
NS2	男	60代	
NS3	女	70代	
NS4	男	50代	*
NS5	女	30代	
NS6	男	50代	*
NS7	女	70代	
NS8	男	40代	
NS9	女	40代	*

3.2.3 分析手順

- 1) 最初の質問をインタビューの始まりとし、お礼をいうところでインタビューの終わりとして、すべての会話を文字化した。
- 2) NNS が始めた意味交渉のみを分析対象とし、該当する発話部分を取り出した。意味交渉が始まる際の NNS の発話（マーカ）の言語形式に注目して分類した。
- 3) NNS のマーカに対する NS の発話（応答）の言語形式に注目し、応答を構成するさらに小さい単位（言語要素）に分類した。その際、非言語によるもの、笑いだけのものなどは分析対象から除いた。
- 4) 先行研究 Varonis and Gass (1985) を参考に、意味交渉の話題毎のユニットを「pushdown」と捉え、1つの意味交渉のなかに pushdown が1つだけだったもの、応答が新たな pushdown を引き起こしたため pushdown が合計2つ以上となったものとのグループに分け、それぞれのグループに属する NNS と NS の発話について、その言語形式に注目して分析を行った。
- 5) NNS のマーカのうち、上昇調の反復マーカに対し、母語話者がどのような応答をしたかについての分析を行った。特に、母語話者の応答の言語要素のうち、pushdown の数に関連する要素に注目して詳しい分析を行った。

3.2.4 pushdown の定義

以下の会話例（1）では NNS の質問（発話 001）に対する NS の答え（発話 002）について、NNS はマーカを発し（発話 003）、以下発話 003 から 008 まで意味交渉が行われる。発話 003, 004 は「随時」について発生した pushdown であるが、発話 004 の NS の応答をきっかけに「月曜日」について発話 005 から新たな pushdown が起こっている。発話 007 でも NNS はマーカを発しているが、これは NNS の聞き取りの問題であり、その直前の発話 006 が引き起こした新たな意味交渉ではないため、新たな pushdown が生じたとは捉えない。このように、意味交渉において NS の応答に関する意味交渉の1ユニットを本研究では pushdown と呼び、NS の応答が新たな pushdown を引き起こしたかどうか、その場合の NNS のマーカに対する NS の応答に注目して分析を行った。

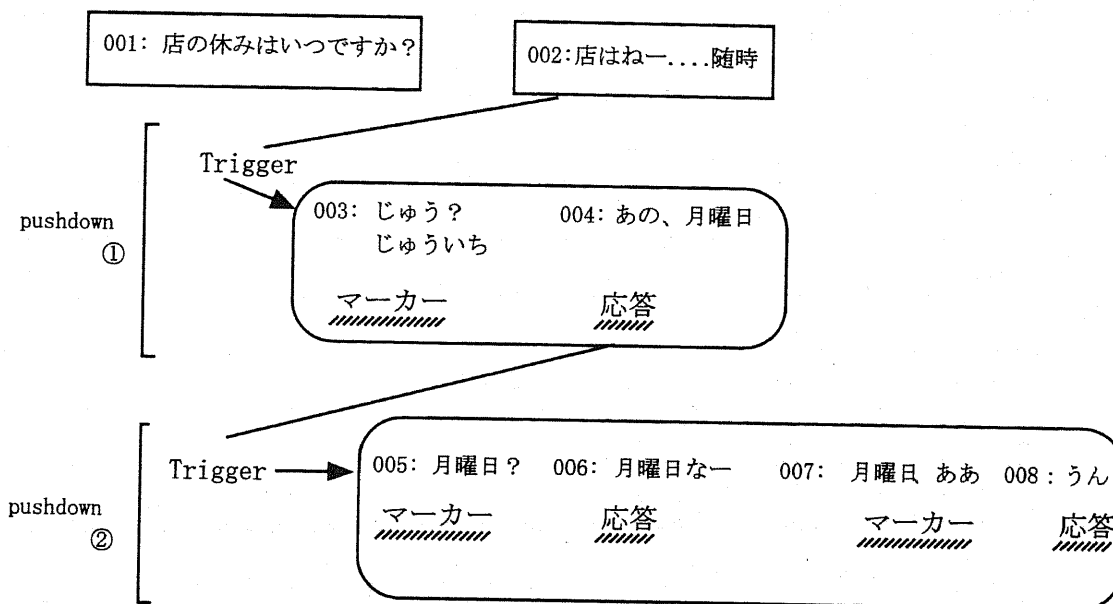
図 1.0 中の□で囲んだ部分は本来の会話の流れ、○で囲んだ部分は意味交渉の会話のまとまりを表す。また、意味交渉のきっかけを表す Trigger（引き金）は先行研究 Varonis and Gass (1985) より引用した。

会話例（1）

- 001 NNS1: 店の休みはいつですか
002 NS2: 店はねー、(ポーズ) 随時
003 NNS1: じゅう? じゅういち
004 NS2: あの、月曜日
005 NNS1: 月曜日?
006 NS2: 月曜日なー
007 NNS1: 月曜日、ああ
008 NS2: うん

※「?」: 語末・文末の上昇調、「(ポーズ)」: 2秒以上のポーズ、「,」: 息継ぎ、「.」: 息継ぎより長めのポーズ

図 1.0 意味交渉における pushdown 例



4. 結果

4.1 マーカーの言語形式と効率的な意味交渉

4.1.1 マーカーの分類

初級学習者の NNS が使用したすべてのマーカーを言語形式に注目して分類した。その結果、本研究データには以下の 7 種類のマーカーが見られた。

- (1) NS の発話または発話の主要部分を上昇調で反復する『反復（上昇調）マーカー』
- (2) NS の発話または発話の主要部分を非上昇調（注 2）で反復する『反復（非上昇調）マーカー』
- (3) 既知の表現で言い直す『既知表現マーカー』
- (4) 「もう一度」と言う『もう一度マーカー』
- (5) NS の発話の内、聞き取れた音のみ真似をして発する『発音模倣マーカー』
- (6) 「んー」「あー」というフィラーまたは沈黙する『フィラー・沈黙マーカー』
- (7) 自己反復をする。NS の言葉をそのまま何度かエコーのように自分自身で繰り返す『自己反復マーカー』

4.1.2 マーカーの言語形式と pushdown の数

次ページの表 2.0 に NNS が発したマーカーと pushdown の数との関係を示した。本研究での「引き出し率」（町田 1997）とは「NNS が発したマーカーがどれぐらい NS の応答を引き出したか」を表している。これは NNS が発したマーカーの数に対して NS の応答の数が占める割合から算出したものである。表中の「pushdown が 1 つ」は、その応答を含んだ pushdown のみでその意味交渉が終わり、新たな pushdown を作らなかった応答のことである。また、「pushdown 2 つ以上」とは、その応答が新たな pushdown を引き起こしたため、合計 2 つあるいはそれ以上の pushdown を作った応答のことである。以下、本文中は「pushdown 1 つ」あるいは「pushdown 2 つ以上」で記す。

表 2.0 各マーカ―に対する応答数

	NNS マーカ―	NS の応答	引き出し率	pushdown 1 つ	pushdown2 つ以上
反復（上昇）	120	107	89.2%	55	52
反復（非上層）	316	240	75.9%	190	50
既知表現	66	62	93.9%	50	12
「もう一度」	2	2	100.0%	2	0
発音模倣	57	38	66.7%	17	21
フィル―、沈黙	45	29	64.4%	11	18
自己反復	20	11	55.0%	9	2
合計	626	489	78.1%	334	155

表 2.0 に示したように、反復（非上昇調）マーカ―、反復（上昇調）マーカ―の順に出現数が多く、特にこの2つの反復マーカ―は他のマーカ―に比べ、大幅に出現数が多いことがわかる。マーカ―と pushdown の数との関係では、同じ反復マーカ―でも反復（非上昇調）マーカ―の約 80%（190 個）が pushdown が 1 つの応答となったのに比べ、反復（上昇調）マーカ―の場合には、pushdown が 1 つのものと 2 つ以上の応答とがほぼ半数ずつであった。

4.2 反復（上昇調）マーカ―と NS の応答

4.2.1 応答を構成する言語要素

新たな pushdown を引き起こすかどうか注目して NS の応答を構成している言語形式の分類を行ったところ、最終的に以下の 4 つの言語要素が見られた。

- (1) 「はい」「そうです」などのような『返事』
- (2) NNS のマーカ―、NNS のマーカ―の前に発した NS 自身の発話をもう一度言う『反復』
- (3) NNS のマーカ―あるいは NS 自身の既出の言葉を他の表現で言い換える『言い換え』
- (4) 文法的な不完全さを補ったり、具体例をあげたり、補足説明を加えたりなど、その時点まで未提出の言葉を追加する『追加情報』

4.2.2 反復（上昇調）マーカ―に対する応答の言語要素構成

NNS が反復（上昇調）マーカ―で始めた意味交渉において、pushdown が 1 つの応答と pushdown が 2 つ以上の応答とに分け、それぞれのグループの応答を構成する言語要素を比べた。その際、1 つの応答に返事と反復を同時に含むものも個別に数えた。結果は表 3.0 に示す。

表 3.0 反復（上昇調）マーカ―に対する応答を構成する言語要素

	pushdown 1つ	pushdown 2つ以上	合計
返事	31	14	45
反復	20	43	63
言い換え	0	8	8
追加情報	25	8	33

反復（上昇調）マーカ―全体に対しては、「反復」、「返事」を含む応答が多かったが、pushdown が1つの応答と、pushdown が2つ以上のものとの比較すると両者の言語要素の構成の違いに次の3つの特徴がみられた。

- (1) pushdown が1つの応答には「返事」という言語要素を含んだものが多い
- (2) pushdown が2つ以上の応答には言語要素の「反復」を含んだものの割合が多い
- (3) 「言い換え」を含んだものはすべて pushdown が2つ以上の応答になっている

そこで、言語要素「返事」・「反復」と pushdown との関連をさらに詳しくみるために、各言語要素を単独で含んだもの、他の言語要素を伴ったものに分け、それぞれ χ^2 検定を行った。その結果、「返事のみ」行った応答と pushdown の数との間に5%水準 ($\chi^2(1) = 9.51, p < 0.05$)、および「返事と反復を両方含んだ応答と pushdown の数との間に10%水準 ($\chi^2(1) = 7.70, p < 0.1$)で、それぞれ有意な関連がみられた。「反復のみ」行った応答と pushdown との間には特に有意な関連はみられなかった。統計処理は SPSS 社の統計ソフト「SPSS」を用いた。

表 4.0 返事・反復と pushdown の数

	pushdown 1つ	pushdown 2つ以上
返事のみ	20	8
反復のみ	22	20
返事と反復	11	6

表 4.0 および統計結果から、上昇調反復マーカ―に対し、pushdown が1つの効率的な意味交渉となるには、返事をする、あるいは返事と反復をする、といった応答が大切であることが示唆された。

4.2.4 反復（上昇調）マーカ―に対する言語要素「言い換え」

表 3.0 より、反復（上昇調）マーカ―に対し、「言い換え」を行った応答は全部で8例だけであったが、「返事」や「反復」といった他の要素と同時に用いられているかどうかの如何にかかわらず、すべて pushdown が2つ以上の応答、即ち、その応答自身が新たな pushdown を引き起こしていた。そこで言語要素「言い換え」を含む応答の会話例を個別に分析し、新たな pushdown を引き起こした要因について質的な分析を試みた。

その結果、同じ語彙の「言い換え」でも、英単語への言い換えの他、答えそのものの変更、関連する語彙への言い換え例がみられた。いずれも NNS の理解を助けるために行った言い換えである。また、標準語、あるいは地域語への言い換えは、より正確な日本語を NNS に対して使わなければならない、という意識からきているものと考えられる。このことはフォローアップインタビューにおいて、「標準語を話した方が NNS にとって分かりやすい

という意識で方言を使い分けている」という全員に共通した発言からも支持される。

※会話例の//は発話の重なりを表す

【相手が理解しやすい語彙に言い直した例】

- 会話例(2) <答えそのものの変更>
001 NNS1 あー、店の休みはいつですか？
002 NS2 みせはねー、(ポーズ) 随時
003 NNS1 じゅう？じゅういち
→004 NS2 あの月曜日
005 NNS1 月曜日？

- 会話例(3) <英単語への言い換え>
367 NNS4 休み、なにを//しますか
368 NS4 //フィッシング. つり
369 NNS4 つり？
→370 NS4 フッシング
371 NNS4 うっし？
372 NS4 つり、フッシング
373 NNS4 あー、fishing

- 会話例(4) <関連ある語への言い換え>
182 NS5 たんぼ
183 NNS3 たんぼ？
→184 NS5 んー. お米.
185 NNS3 たんぼ、おー、かしてーください

【標準語/地域語への言い換え例】

- 会話例(5) <「ちさい」→「ちいさい」>
354 NNS4 おっきいですか？ に//ぎやか？
355 NS7 //ちさいねー
356 NNS4 ちさい？
→357 NS7 うん、ちいさい町
358 NNS4 ちさ//い？
359 NS7 //うん、ちいさい町ね

- 会話例(6) <「さびしい」→「さみしい」>
240 NS3 さびしい
241 NNS2 さー？
→241 NS3 びー. さみしい
243 NNS2 さみしい？
244 NS3 (ポーズ) まちです
245 NNS2 さみしいー

【肯定する代わりに同義語で確認した例】

会話例(7)

- 097 NNS2 なし？
→098 NS3 (ポーズ) ありません, ということな？
099 NNS2 (ポーズ) ありません？
100 NS3 そう
101 NNS2 でーこー (ポーズ) とな. でことな

5. まとめと今後の課題

4.1.2の表2.0に示したように, NNSが用いたマーカの言語形式によってNSから引き出す応答の数や最終的にpushdownが1つの応答となった数に差が見られた. マーカの言語形式とpushdownが1つの応答の出現との間の関連は χ^2 検定による統計処理によっても支持された($\chi^2(4)=23.39, p<0.001$). この結果から効率的な意味交渉の要因を明らかにするためには, NSの発話のみに焦点を当てた分析だけではなく, NNSが発したマーカとそれに対するNSの応答といったプロセスの分析が必要であることがわかる. 本研究では言語形式という客観的に分析可能な現象に注目し, NNSのマーカに対するNSの応答を分析した. 従って, NNSには意味交渉を始める意図がなかった発話に対してNSが応答をしまい, 期せずして意味交渉が始まってしまうケース, あるいは逆にNNSのマーカにNSが留意しなかったため, 意味交渉が成立しなかったケースもみられた. 例えば前者の例ではNNSがエコーのように自分自身で反復をしている「自己反復マーカ」に対し, NSが新たな発話をしてしまい, NNSの理解を混乱させたり, 後者ではNNSのマーカがNSの発話と重なることが多い「発音模倣マーカ」などにその現象がみられた. 意味交渉における母語話者の適切な発話を考える上で, こうした意味交渉成立そのものに関するNNSとNSとのやりとりの問題例を数多く分析する「問題分析」(ネウストブニー1995)が必要だと考える.

また本研究では, 日本語能力が十分ではない初級学習者に対し, 日頃あまり外国人と接触経験がない日本語母語話者との会話から, NSの発話の問題点を抽出する分析を試みた. 日本語初級学習者にとって教室の内と外の日本語のギャップは常に問題になるところである. NSの発話のどこに問題点があるのか, 今回は1つの試みとして意味交渉でのNSの応答が新たな意味交渉を引き起こすかどうか焦点をあてた分析を行った. 今後はもっと分析対象とする会話の種類を増やし, 「初級学習者にとって分かりやすい話し方」の実証研究を行っていきたい. そのためにはまず今回試みたような方法論の議論からの出発が必要であると考える.

(注1)

『コンピュータ用語英和辞典』(1996:835)のpushdownの説明には「プッシュダウン, 後入れ先出し」とある. これは先に入れたものが順番としては先に取り出されるのが通常であるが, 例えば箱の中に物を入れたるように, 後から入れたものを先に取り出す, という順番で行う操作を指す.

(注2)

文末の音調には理論上は「上昇調」「平調」「下降調」の3種類があるが, 「平調」と「下降調」を弁別することは困難である(国立国語研究所1963). 従って本研究では「平調」と「下降調」の音調は, 「上昇調」に対立するものとして「非上昇調」という名称を用いる.

参考文献

- 和泉元千春 1998 「日本語学習者の接触場面におけるコミュニケーションの破綻-使用語彙の簡略化の観点から-」『日本語・日本文化』24, 19-34. 大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 池田隆介 1998 「日本語フォリナー・トークにおける語彙の修正に関する一考察」『比較社会文化研究』4, 31-38. 九州大学大学院比較社会文化研究科.
- 大平未央子 1998 「日本語母語話者が非母語話者に対して行う質問の成功と不成功-インプットを理解可能にする調整とは-」第9回第二言語習得研究会(全国大会)配布資料.
- 尾崎明人 1992 「聞き返しのストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』251-263. 名古屋大学出版会
- _____ 1993 「接触場面の訂正ストラテジー - 聞き返しの発話交換をめぐって-」『日本語教育』81, 19-30. 日本語教育学会
- 御館久里恵 1998 「日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー・トークの諸相-非言語行動を含めた談話過程の観察から-」『日本学報』17, 111-121. 大阪大学文学部日本学研究室
- スカーセラ, R. C.・オックスフォード, R. L. 1997 牧野高吉訳 『The Tapestry of Language Learning 第2言語習得の理論と実践-タペストリー・アプローチ -』松柏社
- スクータリデス, A. 1981 「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45, 53-61.
- 日外アソシエート編 1996 『コンピュータ用語英和辞典』p835 日外アソシエート
- ネウストプニー, J. V. 1995 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 町田延代 1997 「電話におけるフォリナー・トーク・ディスコースの違い-日本語非母語話者の言語能力と交渉-」『第二言語としての日本語の習得研究』1, 83-99. 第二言語習得研究会
- 宮崎里司 1999 「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」『日本語研究と日本語教育』, 368-380. 明治書院
- Ferguson, C. A. 1971 Absence of copula and the notion of simplicity: A study of normal speech, baby talk, foreigner talk, and pidgins. Dell Hymes (Ed.), *Pidginization and Creolization in Language*, 141-150. Cambridge: University Press.
- Hatch, E., R. Shapina and J. Wagne-Gough 1978 Foreigner talk discourse. *ITL: Review of Applied Linguistics*, 39 (40), 39-60.
- ロング, ダニエル 1992 「日本語によるコミュニケーション-日本語におけるフォリナー・トーク中心に -」『日本語学』11, 24-32. 明治書院
- Long, M. H. 1983 Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied linguistics*, 4 (2), 126-141
- Miyazaki, S. -1998 Communicative adjustment between native speakers and non-native speakers of Japanese in contact situations. Unpublished Ph.D. thesis, Department of Japanese Studies, Monash University.
- Varonis, E. and S. Gass 1985 Non-native/non-native conversations: a model for negotiation of meaning. *Applied Linguistics*, 6 (1), 71-9